

— 親友とのセンチメンタルジャーニー

### カンボジアの10日間

初めての陸地からの国境越えは、私たちの緊張をよそに意外とスムーズに行われた。しかし、バスから降り30メートルほど歩いて、またバスに乗り込み今度は荷物をすべて持ってバスを降りて出国手続きを行わなければならない。出国と入国とで三回バスを降り降りした。その度にバスからはぐれないように必死だった。

約10時間後、いよいよカンボジア第二の都市シエムリアップに着いた。

クメール語で書かれた看板は予想もつかないほど内容が読めない。

しかしこの都市は観光地であるため、街の商売人はほとんど簡単な英語を話すことができる。

私たちは一日目のバス「Tuktuk」と呼ばれる「ちんちんのタクシー」で移動した。

このTuktukは、現地では外国人の重要な移動手段となっている。

運転手は、私たち外国人を見るたびに、「Hey-Tuktuk」と聞こえる。

この誘いがあまりにもこつこつなので、外国人はそのうちこの誘いに嫌気がさしていいの。

街に「No Tuktuk today and tomorrow」と書かれた「シヤツ」を見かけたときは、思わず笑いが止まらなくなってしまう。

私たち以外の外国人もみんなこの誘いに呆れてしまっていること、そしてこの「シヤツ」を売っているカンボジア人もそれを自覚していること、半分かよっかいを出すつもりで私たちに声をかけているのだと思いつ、呆れて、そしておかしくなっていました。

Tuktuk はやっぱりおき、いよいよカンボジアに

オーストラリアと日本のNGOを見学するこの大きな任務が待ち構えているこの国で、気を引き締めていこう！と決めた。



### カンボジアで活躍する日本のNGO

カンボジア到着二日目、カンボジアで教育支援、技術提供を行っている日本のNGO、JVCを訪問した。

シエムリアップからバスで一時間のコンポンクティ。

シエムリアップが観光地であるの比べ、ここは一人の外国人も見かけないほどの Country

Sideであった。私たちは寝ぼけたまま、バスを降り、バイクの後ろに乗せていただき、事務所へと移動した。



インターシップ中の石川さんに活動内容について説明していただき、お昼は近くの屋台で地元の人たちに紛れて食事をした。三人で食べて、ひとり1.5ドル程度だった。

お昼休みに、JVCカンボジア事務所で働いているスタッフの一人のかたの家にお邪魔させていただくことになった。バイクでゆっくり走り、20分程度のJVCでもね。

この家庭訪問は私たちを驚かせた。家は木材で作られていて、去年の夏中国でボランティアをしたときの家と同じようだった。私たちが到着すると、おじさんが30メートル程もあるヤシの木にスイスイ登っていった。私たちに搾りたての椰子の木ジュースをご馳走してくれた。

親戚の女の子は20歳で、元気な女の子を出産したばかりだった。

ここは、とにかく子沢山で、横たわっている犬には6匹の子犬たちが一生懸命しがみついている姿を見とれていた。今度は鶏の親とその後ろをついてくる沢山のひよこたちが見えた。

ここでは、犬も鳥も共存している。

人間同士は様々な派閥が生まれ摩擦が生まれる。ときに人間は動物にも優らないのかもしれない、とふと思った。

午後は小学校を訪問した。

子供達は私たちを最初は別の惑星から来た人たちのように興味津々な顔で見つめていた。

しかし、授業の休み時間に教室に入り、カメラを出すと嬉しそうにレンズに入ってきた。

私たちは一緒に写真を撮ることで、異国の壁を溶かしていった。

この学校では、日本から肉や魚などのフリーズドライの缶詰、そしてUSAから小麦が送られてきている。

そして毎日近くに住む人たちがボランティアで朝食を作り、子供たちに無料の朝食を提供している。

元気な子供達に大きく手を振り、私たちは最初の小学校を後にした。

## Emma ヲ 紹介

1995年、CPCS(Centre for Peace and Conflict Studies)の事務所を訪問する日が来た。

スタッフのメーガンがホステルまで、Tuktukで迎えに来てくれ、ひとつひとつ複雑な事務所を案内してくれた。

そして会議が終わったころに南京大学で出会った Emma ヲここにカンボジアのシエムリアップで再会を果たしたのだ。

Emma ヲ大らかなハグをしたあと、Emma は私たちに今後のカンボ



シアでの平和の旅をコーディネートしてくれた。  
それは北朝鮮の方々が投資して設立したアンコールワット博物館と、シエムリアップのキリン  
グ・フィールドであった。

翌日は日本の地雷撤去団体 CMC を訪問することになっていたので、翌夕日に Emma ウィン  
チを共にすることを約束して事務所を後にした。

### 日本の地雷撤去 NGO、CMC 訪問

カンボジアのバットバンはタイとの国境線まで 2 キロの距離にあり、カンボジアの中でもま  
だ地雷の撤去されていない地域である。

バイクで一本道を走っていくと、あたり一面綺麗に整えられたただっ広い土地が見える。

そこは地雷撤去がすでに終わったところであり痩せた牛が草を食べている姿を見かけた。

私たちはまず、地雷被害者宅を訪問した。

ボイスレコーダーを準備し、わたしが日本語で質問をして、それを CMC スタッフの松元さん  
が英語に訳し、それを CMC のカンボジア人スタッフがクメール語に訳す。

質問は、センチティブなものもあったかもしれないがどれもしっかりと生の声を聞くことがで  
きた。

地雷被害者の Vira さんは反政府軍として軍隊に入り、銃を持って森の中に入った時に地雷を踏  
んでしまった。そして左足を奪われた。

1995 年、23 歳の時である。現在は三人の子供の父親で奥さんが町へ出稼ぎに行き Vira さん  
は家事を行っている。30 分のインタビューの最後に、「わたしは Vira さんの「希望」を訪ねた。

するよ」、「いまは、たとえ敵でも見方でも、誰にも地雷を踏んで欲しくない。そして一日も早  
く、地雷を全て撤去してほしい。」と語ってくれた。

また、自分自身については、「息子に大学を出て欲しい。」と希望を語った。カンボジアでは、  
村の出身で大学を出られるのは一割にも満たない。二人の息子には自分らしく生きてほしいとい  
う願いを語ってくれた。

### Emma シン兼 平和(自分)と平和(みんな)

翌日の午前中、CPCS の事務所に行き、平和に関する本を読みあさった。

ここには、平和に関する本しかない。普段英語の読解は得意ではないが、自分の一番興味のあるこの分野の本は、何  
時間でも見ていられる気がした。

あつという間にお昼になり、仕事を終えた Emma が降  
りしきた。

Emma の車に乗るの込むと、カンボジア料理のおいしいリス  
トランに連れて行かれた。

Emma は、オーストラリアで修士課程を終えたのち、カン  
ボジアに渡り、まずはボランティアから始めた。

ゼロからのスタートだった。そして、18 年経った現在は、  
カンボジアに在住し、クメール語を習得し、カンボジア人  
の夫を持ち、カンボジアで平和を作る NGO を運営してい  
る。

私は、Emma に自分の夢を、そして達成できていること



標について相談した。  
私の顔は暗かった。  
奨学金をもらって中国に留学しているのに何一つ貢献を果たせていない、と。

Emmaは私の話を聞いて聞いて聞いた。  
そして、うなづいた。

「Emi、あなたは南京大学で平和学を学ぶことを選んだ。あなたは、冬休み日本に帰らずにここカンボジアに来ることを選んだ。」

そして、あなたは平和学を学ぶことを選んだ。  
だからわたしはあなたがここに来ることを受け入れたのよ。あなたはもう、自分の進む道は心の中で分かっているはず。」

最初は Emma の言葉を消化するのにうがてできなかった。

しかしこの言葉は、インドネシアまで来て、やっと理解し納得することが出来ることになる。  
この先の旅にも不安が募っていたわたしに、Emma の言葉は私に勇気をくれた。



私たちが、これから行くジャカルタでテロが起きたことに触れると、Emmaは、「世界は広いのよ。あなたたちがテロに遭う確率は、ここで交通事故に遭う確率よりはるかに低いわ。」と笑顔で言った。  
たしかにそんな気がしてきた。恐れていたら前に進むことができない。

Emmaと大きなハグをして再会を誓い、私たちはシエムリアップを離れた。

## 二日間の合宿

翌早朝、私たちはEmmaの夫Nyanの車に揺られていた。

シエムリアップからの時間のバタンボーンに向かうためだ。

2週間の旅の疲れが溜まっていたのか、連日の早起きで疲れたのか、車に乗っている間ふたりともずっと寝てしまっていた。

着いた先は、CPSSの建てた小中学校。

ここでは地元の学生が通い、また世界中からボランティアで学生が来る。

私たちが行ったときはちょうど台湾からの学生がここで英語を教えるボランティアを行っているた。

私たちは、学校の真向かいにあるバンガローに泊まることになった。

ここで二日間カンボジアの学生、そして台湾の学生と交流することになる。

台湾の学生は笑顔で日本から来た私たちを歓迎してくれた。

私たちは、木のテーブルを作ったり子供達と一緒にカンボジアの伝統楽器を弾いたりして交流した。

夜バンガローに戻ってくると、問題は起こった。

シャワーが出ない。。。子供達と泥だらけになってサッカーをした後に、シャワーを浴びないとい

う選択肢はなかった。しかし、どこをどうひねっても浴室のシャワーは水一滴出ない。私はトイレのところまで歩く。便器の横にシャワーのようなものを見つけた。手に取ると水が勢いよく吹き出した。

私は親友のまこに相談した。

「このシャワーって、便器の横にあるけど、何のために使うと思う？」もちろん、聞きながら自分でも薄々分かっていった。

東南アジアの大部分の地域ではトイレットペーパーを使うという習慣がない。

その代わりに、便器の横にこのシャワーが設置してある。

私はこのシャワーを握り締め、ためらっていた。全てを忘れて、無になって、私はシャワーを浴びた。

人々がこのシャワーを使って何をするか、この水がどこから来たのか、気にしない。ただ、心を無にしてシャワーを浴びた。人生で初めての試みだった。

二日間の合宿は、短い時間だったが私たちを強くした。

テレビもWi-Fiもシャワーもないバンガローでの生活。食事は40人もの台湾からの学生と分け合って食べ、鶏のコケッコウの声で目覚め星が出るころに眠りに就いた。ここは星がとても綺麗だった。

最終日に私が中国語で台湾の学生と話し始めると、彼らはとても驚いていた。これまでは彼らに合わせて英語で会話をしていた。しかし、中国語で話すことでやはり距離がかなり縮まった。。。いよいよバスでカンボジア首都プノンペンに行くときが来た。

### プノンペンの虐殺記念館、キリング・フィールド

プノンペンにいったのはたしか、夜だった。日が暮れて、ライトアップされた看板がやけに目立った。日本のCANON、Panasonic、中国銀行など日系、中国系企業を見つけたと嬉しくなった。遠いカンボジアにいるのに、日本や中国が近いように思えた。

翌日からさっそく、プノンペンに来た目的であるキリング・フィールドを訪れた。

入口で日本語のガイドの流れるイヤホンをもらうと、それをつけて回った。

全部で30箇所以上の見学スポットがあり、すべての解説を聞いて回ったところには2時間以上経っていた。



1975年、ポルポト政府は革命を開始した。

都市部に住む人々を農村部に移動させ、過酷な労働を強いた。ポルポトは、農業こそ国家の基礎であり、非常に重要であると考えていた。そしてその他の職業に就くものは全て革命の邪魔者だと考えていた。

そこでポルポトは、医師や教師、弁護士などの職業に就く人たちを片っ端から捕まえて、拷問の末殺した。それだけでなく、メガネをかけたひと、手の綺麗なひとなど、信じられないが、本当にそれだけの理由で人々を捕まえ、キリング・フィールドへと送った。

このシエノサイドの亡くなった人々の数は200万人、当時の人口の4人にひとりである。

キリング・フィールドを見学する人々はみな無言で、悲しい表情をして、一歩一歩歩いてた。

あまりにも残酷な現実が目の前にあり、まるで自分がタイムスリップしてそこにいるかのような錯覚まで抱いた。

当時の骨や、被害者の衣服、穴の空いた頭蓋骨など、それらを見るたびに、何とも言えない感情がこみ上げてくる。ここで、カンボジア人が、カンボジア人を、殺したのだ。

血の関係を断つために子供も容赦なく殺した。どこか見覚えのある光景は南京大虐殺を思い出させた。



『英末東南アジア平和之旅』と自分なりのタイトルをつけて旅したこの力国。

私が見てきたのは東南アジアの様々な国の戦争の歴史と、平和をもとめて活躍する人々、そして現在の日本の姿だった。

このあとに旅するベトナムで学んだベトナム戦争の歴史、インドネシアでホームステイ中に、ホストファミリーから聞いた「かつての日本の姿」。

日本人にとって「被害者」の日本は、東南アジアでは間違いない「加害者」であった。しかし、それらの国で活躍する日本のNPO団体や日本人の方々の生の姿は、私に力強い希望を与えてくれた。

中国で「歴史学」を学ぶ学生として、ひとりでは持ちきれないほどの戦争責任と深い悲しみの心を養った。

それは南京大学での一学期だけでも、抱えきれないものだった。しかし、現地の人々の優しさや寛大な心は、わたしに前に進む勇気をくれた。「前事不忘后事之师」過去のことを忘れずに、未来の糧にすること。

歴史を学ぶのは難しい。しかし、私はひとりではないということ。国籍を越えたこんなにもたくさんの人たちが、私のことを支えてくださっているのだということを感じた。

PS. カンボジアには十日間滞在した。たくさんの人との出会いがあり、たくさんのお話が生まれた。

ここでは、すべてを書く事ができない。しかし間違いないこと、たくさんのお話が生まれた。ありがとうございます、カンボジア。